優秀賞（NHK 横浜放送局長賞）

普通のために動いてみること

伊勢原市立中沢中学校　１年　宮下（みやした）　輝香（てるか）

３歳の頃から始めたクラシックバレエ、小学２年生からコンクールに出るようになり、友達も居たし、憧れるヴァリエーションもいっぱいあって毎日夜遅くまでがむしゃらに練習した。両方の祖父母が遠くまでコンクールを見に来てくれて、帰りには抱え切れない花束をもらい嬉しくて誇らしい日もあれば、たくさん泣いて記念写真どころではない日もあった。友達より順位が良くないことを気にして楽しくないときもあった。

そんな日々と努力は私をいくつかの大きなコンクール入賞まで導いてくれた。大きな舞台でのくるみ割り人形に参加したこと、清里の野外ステージで素敵な入賞者と踊ったこと、この10年をふと立ち止まり思い出してみるとメリーゴーランドのように私の心の真ん中でキラキラと輝いている。

この春に中学生になり、私が過ごす時間のいろいろなことが変わった。部活に入りたい、小学校卒業の頃にそう決めたことは普通のことのようで私にとってはすごく大きなことだった。

私がそのような考えになったのは勉強や家のこと、遊ぶことなど、バレエ以外の普通のことが人よりもできていないような気がして、このままでいいのかなと不安に駆られることが今まで何度もあったからだ。

例えば、今までは友達の家に行くのも習い事の合間を縫って行くので母に車で送ってもらう。次にいざ自分だけで自転車で向かうとどこで曲がるのか全然わからなかった。道なんて気にして覚えておこうとか今まで思わなかった。また、最近は部活の練習試合でバスを利用することがあるが、乗り方も長い乗車も慣れなくて気分が悪くなった。他にも今まであまりしてこなかったことがいくつもある。

母から年下の面倒を見るのが得意じゃないよねと言われることがあり、言われる度に前から心の中で少しむっとしていた。

そんな私が部活に入り感じたことは、先輩に声を掛けてもらえると嬉しいし頑張れること。面倒を見るとかじゃなく、周りの人を気にかけて何かあったら言ってね、教えるよという気持ちで率先して動くことなんじゃないかなと思う。大きな声でリーダーシップを発揮できるタイプではないけれど、穏やかで話しやすい後輩から頼られる先輩になれたらいいなと思う。

１学期は初めての中間期末テストも経験し、人生で一番忙しいのではと兄が言う中学生活が本格的に始まったところだ。夏の部活の練習は想像以上にきつい。オフの日を楽しみに日々が過ぎていく感じがする。

そんな中、久しぶりに家族が揃った夕食で部活の話題になった。兄はサッカー部だったので、「練習メニューは自分が思っていた倍以上きつい。特に走るメニュー、普段車に頼っていた私には相当苦しい。」と伝えると、

「そうだね、でも辛かったからこそ楽しかったよ。」

と言われた。最初はそんなもんかと思ったけれど、なぜか頭から離れなかった。確かにそうかもしれない。苦手なことも辛いことも助け合える仲間と一緒に駆け抜ける中学校生活は、どこかで最高の青春になると思えた。

今までは夕方に家に居ることが少なくて炊飯器でご飯を炊くこともしたことのない私が、家族のために母に教えてもらいながら青椒肉絲とスープとご飯の夕食を作った。とても美味しくできた。

翌日、母がパートに行った後に部活で軽食が必要なことに気がついた。覚えたての炊飯器でご飯を１合炊き、冷蔵庫にあった瓶の鮭を具に入れておにぎりにして持って行った。残ったご飯はタッパーに入れ冷蔵庫にしまい、急いで部活に向かった。

帰って来た母にその話をしたらとびきりの笑顔で「偉い、自分で考えてそれができたのってすごくいいね。」と言ってくれた。何だかバレエで入賞した時以上に母は嬉しそうだった。

私の兄は、夜のお風呂のために、言われなくても朝シャワーのついでだと浴槽を洗っておいてくれる人だ。そして母は毎日お風呂ありがとうと兄に言う。なんかいいなと思う。

普通のことがずっと続いていく日常。自分ができることを増やす。一緒にいる人が心地よいことをする。時折、がむしゃらにバレエをしていた時の自分が「これで良かった？」と私に尋ねるけど、正直まだ分からない。始まったばかりの中学校生活で私がどんな風に変わって、動ける人になるのかが今は楽しみなんだと答えたい。